特集

加齢医学における画像診断

超高齢社会に求められる画像診断・検査のノウハウ

企画協力：
奥田逸子
国際医療福祉大学三田病院
放射線診断センター准教授

わが国では，2025年に団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり，認知症高齢者数が約700万人，65歳以上の高齢者の5人に1人に達すると推定されています。これを踏まえ，現在，国を挙げて2025年に向けた医療政策が取り組まれています。日常診療でも今後さらに高齢者が増加すると予想されることから，放射線診療においても，加齢による解剖的・生理的変化を理解し，検査法や所見の特徴を知ることは，質の高い診断・検査のためには非常に重要です。本特集では，部位・領域ごとに，加齢のメカニズムを整理した上で，高齢者に対する検査や疾患の画像所見・診断のポイントについて取り上げます。

1. 総　論
――加齢を画像診断学的に評価することの意義

奥田　逸子　国際医療福祉大学三田病院放射線診断センター

加齢医学に対する取り組み

放射線診断専門医は，病院の内外でほぼ毎日のようにCTやMRIの画像診断レポートを書いている。かくいう筆者もその一人である。もう10年以上前のことである。いつものようにCTの報告書を書いていた。それは，副鼻腔炎が疑われる顔面CTの症例であった（**図1**）。上顎洞などの副鼻腔の所見を書いていたところ，上顎骨腹側の皮下に帯状構造物があることに気がついた。それらの構造物をよく見てみると，左右対称的で規則性があった。CT精度が向上し画像の高分解能化によって，表情筋などが鮮明に描出されるようになってきていた。従来から抗加齢医学に興味を持っていた筆者は，これを顔面の加齢性変化の研究に使えないだろうかと考え，課題に取り組み始めた。

顔面のCT症例を数多く観察していると，加齢に伴って頬の形状が変化するだけでなく，表情筋の厚みが異なっていることに気がついた。そこで，2010年の北米放射線学会（Radiological Society of North America：RSNA）でこれを報告した。この報告は注目を浴び，同学会の会期中に発行される機関紙Daily Bulletinの取材を受け，共同研究者らとともに写真入りで紹介された（**図2**）。さらに，翌年にはRSNAの月刊誌であるRSNA Newsから，顔面加齢について の追加取材を受けた[1]。嬉しいことに，RSNA 2010の発表の画像を巻頭に使用していただいた（**図3**）。これらのことから，加齢についての画像診断の重要性や必要性を強く実感した。

最初に興味を持ったのは，baggy eyelidと呼ばれる下眼瞼の膨隆であった。ともすればベテラン俳優の渋みを際

〈0913-8919/22/￥300/ 論文 /JCOPY〉